ＺＥＮホメオパシー学術大会

未曾有の時代をホメオパシー、自然農が救う

コロナワクチン言及の講演相次ぐ

日本ホメオパシー医学協会

自然治癒力アップ重要

活力あるホメオパスの症例発表

日本ホメオパシー医学協会は10月15日、16日の両日、第23回ＺＥＮホメオパシー学術大会を「ワクチン信奉の崩壊　未曾有の時代をホメオパシー、自然農が救う」をテーマに東京・世田谷区のＣＨｈｏｍ東京校、大阪校の各ライブ会場及びご自宅参加者と会場をオンラインで結び、一般公開の形で、全国津々浦々から、２日間で４０００名を超す参加者のもと盛大に開催した。

東京校会場は満員に

由井名誉会長

道繁会長

学術大会は、日本全国および海外で活動するＪＰＨＭＡ認定ホメオパス、ＣＨｈｏｍ学生、とらのこ会員、ホメオパシー愛好者が一堂に会するホメオパシーの一大祭典のコングレス。

工藤聖子さんら症例発表、相次ぐ

最新の講演に学び、活動の成果を症例発表で披露する学術大会であり、また、会員が集って互いの研鑽をたたえ合い旧交を温める、ホメオパシーの仲間たちの嬉しい再会の場でもあり、一般の方にも公開された。

今回の大会では、海外来賓として、ロジーナ・ゾンネンシュミット博士（ドイツ）、トレバー・ガン氏（イギリス）等が、現地からＺＯＯＭ接続で発表。それぞれの国のコロナの状況や対処など、現地から情報を発信、共有した。また、国内来賓として、井上正康名誉教授（大阪市立大学医学部）が新型コロナに関する講演、南出喜久治弁護士が、ワクチン問題に関する講演を行った。

会場には開場時間前から多くの来場者で賑わい、喜びとともに、活気ある開場となった。また、主催・協賛各団体がコングレスに合わせブース出展し、豊受の新鮮な野菜の販売コーナーや、無農薬・無添加の加工食品、化粧品、書籍などのコーナーなどに参加者が集まり、お祭りムードが朝から盛り上がりを見せていた。

マスクを捨てて町へ出ようと井上正康名誉教授

道繁会長が挨拶

開会の冒頭、今回の大会長である道繁良日本ホメオパシー医学協会会長が「先日、新たにＪＰＨＭＡ会長に就任しました。ＪＰＨＭＡコングレスが始まって以来、これまでも様々な危機がありましたが、由井名誉会長のもとに乗り越えてきました。今後、予想される第２次パンデミックの切迫した状況も由井名誉会長の導きのもと、私たちホメオパスが力を合わせて、ＺＥＮホメオパシーを全国に広げていきたいと思います。コングレス開催の関係者の皆様、感謝を致します。本日、第23回ＪＰＨＭＡコングレスを開催できることに喜びを覚えています」と挨拶した。

ホメオパス認定式を行う喜びの森下さん

新たな時代に

続いて、由井寅子名誉会長より「何が嬉しいかというとホメオパシーを公に言うことができるということです。11年間辛抱してきました。ある時期には私がホメオパシーのことを言うと徹底的にたたかれました。ホメオパシーを言うことができなくて、自然農を始めてこれまでやってきました。こうしているうちに自然治癒力を触発するホメオパシーが返り咲きました。真実が明るみに出てきて、予防接種が病気を作っている、症状はありがたい、症状は不要なものを外に出している、病気が治るには免疫が働かないと治らないことなどが普通に理解されてきている。ワクチンが病気を作っていると私やトレバーガンは、かなり以前から言ってきていましたが、それが普通に言われるようになりました。自然治癒力で治すホメオパシーということができます。また、農薬を使う慣行農業では健康を維持できない。自然を破壊するのではなく、人は自然の一部として、土壌菌と同じように生きていく。生きとし生けるものとともに人があり、人は生きものの頂点ではありません。人は並列に命をいただいているということを理解していくことが大切です。第23回ＪＰＨＭＡコングレスを契機に、新たな時代に入っていきます。今日のよき日に大会を開けることを心から喜んでいます。皆さん頑張りましょう」と挨拶した。

症例発表のトップを切ったのは工藤聖子認定ホメオパス　ＪＰＨＭＡ理事。「コロナ禍で心身共に変容した50代・女性アトピーのケース」と題して行った。その後、次から次と症例が発表された。

来賓発表は大阪市大医学部の井上正康名誉教授が「コロナとワクチンの全貌：マスクを捨てて町へ出よう」をテーマに「コロナ狂騒曲の真実と処方箋」というサブテーマでコロナ感染の実態とワクチンの真実に関してわかりやすく解説した。

感染症の過去の歴史を見ると130年前にロシア風邪（元祖コロナが流行し100万人死亡し1年で収束しています。1000年前にはスペイン風邪が流行し1億人が死亡し、1年で収束しています。人の遺伝子は3割はウィルスの遺伝子でこれまで人は感染症と戦い、結果的には共存してきています。ウィルスには薬が効きません。免疫力でしか対応できないということが現実であり、ウィルスと共存するしかないのです。

新型コロナウィルスの感染者数、死亡者数は欧米と日本を比較して見ると大きな差があります。

欧米は非常に多く日本は少ない。統計的に見ると欧米と東アジアでの違いとなっています。

これからみると東アジアの免疫特性に違いがあると言えます。

新型コロナの強毒性のウィルスが日本や東アジアに広がる前に（2020年2月頃まで）弱毒性のコロナが中国人を介して入ってきて、日本や東アジアの多くの人々に感染している可能性があります。

新型コロナの強毒性のウィルスが流行する前に弱毒性のコロナに感染し免疫が訓練されており、集団免疫を獲得していると思われます。

次に新型コロナワクチンに関しては遺伝子ワクチンであり、1回打つとその細胞が死ぬまでスパイクタンパクを作り続けます。影響は計り知れないが、自己免疫疾患が起こる可能性があります。

新型コロナワクチン接種した後すぐに亡くなる人がいることから言えることはワクチンが原因です。海外ではワクチンは効かないということが当たり前になっています。

ワクチンを打った人と打たない人の新規感染者のデータを政府は提示しましたが、データ統計は誤っており、実際のデータを見るとワクチンを打った人と打たない人の差はなく、高齢者では、ワクチンを打った人の方が感染しているという状況になっています。イスラエルでは2回ワクチンを打って効かないので4回まで接種を行ったが感染が爆発しました。世界中をみるとワクチンを複数回やった方が感染しやすいというデータになっています。ワクチンを打つことで免疫力が低下しているのが実態です。

ウィルスにかかり続けると免疫は訓練されて強くなります。新型コロナウィルスの本質は血栓症であり、スパイクは血栓毒です。新型の遺伝子ワクチンは毒であり、それを推進することは医療犯罪とも言えます。

新型コロナの後遺症とワクチンの後遺症はとても似ています。これはスパイクの病態でありワクチンを打つと病気になる可能性があります。次の流行は新型コロナのケンタウルスウィルスであり、70倍の感染力があると言われており、それに対応できるのは免疫だけです。

新型コロナの有効な対処としては、オーラルケア、歯ブラシで磨く、うがい、鼻洗浄、トイレの便座とドアノブの消毒、スマホの消毒などがあげられます。コロナウィルスの特徴とワクチンの実態を説明し、コロナの遺伝子ワクチンは毒であり、いかに免疫が大切なのかを詳しく説明した。

5面につづく